無言抄　中

伊地知文庫
文庫20
216
2

# 無言抄巻中

伊地知氏書冊

## や

祛 よみやはらひと付るまじきかともいふ
儀いらぬ沙汰まで志るへしといへり

八幡 名所や名
非子あるべし

山科乃宮 山科あるべし

山乃も 折もをり峰嶽二ツ根
尾上ホと山のもとは五句さらふ

嵐なる 峰の雲乃まや嵐なるべし
そいふ物なり

山 せいふ字道乃字をもやすめ文字ハ
韻りの面にきらふる他准之

山路 とあらハ帆掛舟などのかハりていたはらず
あるは但可依句体理にて入り候

[stamp]

山おろし よ下嵐なとも二句嫌 山陰 水も下草
なとあしく 他陰り 下紅葉より下て不嫌
とふまりハ天の下おろしこれなとの類ハ不嫌之
かりそめの仮小屋ハしくおろしを

山おろし 山おろし なとをり夕けなとハ景の
字やまれも二句さらふなり

山寺も なと云よハ何まの 山旅 他人倫 雑なり
うけも不嫌之

山陰 とまて又山ふかきけなしわと毎
て又ある毎し他准之

山城のとハぬ なといふてハ名所なり
二句嫌ふなりさしとてあるて
又馬離あるへし他准之

やまのしたく 他降物折の雲なるよりと
して降物 植物なとなく
て行の末流く一まゝかりいうて

山の色 野の名なと小植物二句嫌也 他句に
よる色しとハ雪霜の色なとハ野山
うしなふ植物に不嫌 野山の色は淋しなれとも
いろかりを野山に請ふも秋や植物 二句なり

山の色 なとをり紅葉もりてを嫌 かと云を嫌
京にて言ひならしやうにすと云摩の
好士よ何となくらし 但り聞しめやうりて
きはしきの色帯なり雨を嫌てよからんり

山の霧 りきうらわりを
嫌也し
なとして ハ植物なり

山紫 他の依句といふなり
といふ句に紫の戸 紫の唐の紅

山窓 むる しまなり不可付し

山 ようやうやうとさと云
銅付句もよ[illegible]す

歎冬 一ゑり
[illegible]毎し

や留め本　山の字に嫌付句も　前しかし去

八重桜　虚へ寄るの八重百韻に一やうゝ句　と云て重ね字計ね吊八両紙嫌也

柳　只一もと柳一様をね吊り一是新式乃類也　柳ちり秋や青柳去けつると云て八句論ある也

藪（やぶ）　たゝれていくさ先よ植物ゆ二句嫌あり

宿　出山之物ハいつれも一座よ一なり　只一称よ一座より山外よあり馬乃宿り　霧乃やとり抔の君り又ま嫌し

屋　屋とり　ゟ宿折と嫌馬霧ホ之　やとりハうへよあらし

屋　屋わきや抔のれ折と嫌へし　屋乃字四りりきつさ欲　なとの屋よむすや

芦乃丸や　ありてと嫌あり

矢　矢よとしたや　折と嫌あり

閨　ゟ分紀月雨と　嫌へし

弥生　ゟ月次乃月二句嫌あり

屋よひ　とりあよきつ近しなと必　河汁物　ゟ比興あり絶嫌く

やよひ山　名所にあらす

うらかひのや　二句きらふなりうらかひ　乃やよてハ不とまて是

やまふす　絶句隔てりよろ色し

や文字　あり合と嫌あり

海

**松** に子日二句嫌也従倚白辞新式にハ
二句嫌とありさなから付合にて二句にすへし
かへさかり老葉にも去とも見しあり松のみとり色とも
いふ句にハ子日せし野へも人あれは古今にと宗祇
付られたりやうのすかハかせをとをひてハ此興
たかりのありまねもえとりの千里のかりあれて
もえひめくらんと聞なりまし花綸二句嫌ふへく
あるへし

**松門** 植物にあらす松にて作る門
なれハ松の紀ふたつも用ゆ

**松風** 二や松ろそともあひてハいかにも
一つ吹来ん風秋風山ヶ浦かせなと同
吹来風の下にもあるへき谷風のやうなるへし耳に
さはりあれハ寄一ありし他准之

**松風乃雨** 其の響の雨はつ音乃雨称
とも雨にて嫌是新式に詞

有り混合去るものハ雨に不嫌とハ礎に松風乃者
雨にハさりとはいふ心もありて又松風と志るらん
の雨乃ちかき心もまし然て混合去りあまり
花乃波ちくもり沢にも植を二句五句さらふ
其別まくへく分別あるへし

**松風乃時雨** 冬乃季とりて申にかりけるに
二句嫌ふへし又式目に松
乃色乃雨も大かたハかりめりあれとも降物
乃千歳にいつとはいふ時も二句五句の嫌やうを
常の好むりありりまとつき欤

**松乃煙** 同作業也おく煙に植物を
嫌へし緑合白烟色の心にあらへ
とも分りよハ常と七句去也非常にも植を

**松乃聲** 同松乃ひゞきなとゝあるに **松乃聲と焼**
風体二あるへきらんへし
なとも同植物にハあらすといふ

槙（まき） りまの字付ても紛しからず一句に
とゞまれ
まきの戸 よまの字ある句に嫌まきのやと同前
良枕より出へや柱ハまのえと嫌也
秣（まくさ） まくらに二句嫌 桂曲かも常の字にも二句也
一るの字なりハあけてきらふなり
枕 七句去也なかのまハ嫌ふなり
連歌言抄ん秘く
まりのにはこゑの渡り
鞠（まりの）場（こば） 庭乃心ありて一乃外いづれハまりた
ろ庭のまりれ者なと云句ハ庭に付る心
なり然て庭一乃外よあるまじきなりけらし
鞠の場とハ絵うし乃松原なとうてもけらし
たりてあれて庭の外よまへしなりけれハ
場乃字をかくなり前後近代只庭乃かなふ用也
枕香ハ只枕的まて
や東国の名所なり

窓 ハ戸而と嫌門小戸窓よ門嫌も同前にて
籬（まがき） かくりてハ竹垣を嫌といへとも五句嫌也
只一霧乃まがき又あるなしとまり折
をきらふなり
眉乃霜 陰物なりあれと冬にあらはこれハ
不及理すなはちよりこはり嫌之
まとゐ 又男乃字而と嫌也くれとく
すかり数いつはも人倫なり
的庭 的といふ字入なり二なりまちを
ひしゆふへとおもふなとまりたいのむ又ハこえんとい
へしあふ庭ふ庭木同前なり
真柴 表ニ
なり
まとゐ 同じく表ニ
なり
夕まくら 月の字やきめ字やまくら
も写し不嫌也

波まと　う事、けふとあすの二…

まし　韻りハ二去り折を嫌　只ハ二句去也
他准く

け

今日　百韻り二句去へし

宿ハ　今日ハ今ヲ嫌　昨日明日ホハ二句可嫌けさ
宿りとも不嫌歟

ふ乃こよひ　と云ても毎ハあり候ふと云
て八何も東乃調入て非嫌

宿り　七句去たるへし

煙　打越り候ハ新なとハ付句を
又打越とまらぬなり候ハ嫌ふ新ハ

おもひ煙といへるハみな煙り嫌也　志わかく
かと嫌の句といふ調りまとり嫌色し

世乃なり　哀傷なり　水草　釣　けふ
けなよの煙里の調なとは非哀傷

松木乃　たとへの調は畝を史なとの事にも
あしも納りも他准く

宿り鴇　夏なり　堀川院百首にもよし
夜部り入れり

けたもれ　生類り二句なとゝいふ説あれた
或ハ康猿なとの数ハ句嫌なり
りねといふ字二句嫌へし

あきの

なり宿り　ハ宿けさなとれなり二句嫌
やとかりなとも二句嫌なり

なりあまり　ありをいて　呼なり

〻し　ゑんに而嫌ふ㕝ばかりとも山類は
嫌ひらしかれんに嫌なし只今有ごと

二句嫌へさり

まろけし　古川なし事と打と嫌や筆しと
けきなと此書二句嫌へきり

下知之詞乃　あひしに二句さらぬなりきけ
とゆれなきとにさよなさくべ ふ

新乃あひさ乃かなり

ふ

古寺乃竹庵　なと云ても居所になる
へうすさらはも越ふ
居所をつきまいりといへりやうれすさし
あひよハあしなに用杯なりし數あかし

皇居乃古郷　ーに居ほうらしと可嫌
里といふ字ハ又嫌や

古雜役みつ乃かたりを賀なりれ古にたく
ひなり此外何乃旧記不可勝計
古川　に記嫌なり乃中古川も記ともに於ひ
書さまハ同打と嫌なり只都只古川とよ
おもこたりならまさハ打ありやうと云説ありさてとも
まりきなすや先是ら治定を

古川　名所と只古川乃書り一様に一以上二也
様乃古川なくて名前と只古川と二もあり
古川　に寺ありてなよの古乃字ありを嫌や此數
所に於之

古川　に家係依句新しいふしに而る家係
なといそくあし　他ながく
古れ字乃　嫌ひやうりのすたあとさ様な
よの新打を嫌なりやうさり
いふしく二句嫌なりく

ゆふかほや海士か小家の枕　たまくら　表
きひのきよひろてありなれて表裏なとも　備乃心のもの
こゝにハ男様なるつき詠
海士　夜分なり冬や雪などもひいてハ雑也
舟　海辺をまはる舟ハ雑なり但ハ帳面行大
時雑ありなれと川くまは川舟来て小
舟つなに舟あしまけ舟ともあり船寺舟みな雑
なりあつしは
宇治舟ニ　宇治の舟ハ帆雑なれど冬條
乃舟ハ冬雑なり外にハ
娃とといふも宇治ホの名を冬なりける同家の
人の年ひく不寝ある中ム子あま為す程寝よ入
仰り　とまて文あるりとあれ
船とむる　晒し他准之

船　り枝付ろすあしく又舟のわけ哉よ携可き
夏様晩舟なとの一つ指なりかハありにハ
なくてたか海辺中くなとはいふたく比具
まくらの所に他准之
舟
船岡山　御舟山なと船り豆句嫌　天乃川
舟なとハ雑遊まてハなけれと
舟乃字七句去なり
富士乃煙　浅間の煙　なと句よまりて
恋りなりにハ
藁　山本枕をも嫌みなこれをさす人ありし
也度寺の物なり他枕まてを嫌ずいふと
いへり統ても切りてをきらふなり
藤　只一夜ハ一季をとつて一統季をとつて又
あつきまり夏男みやと云て是新歌の
間や季を久く夏用とありて前途夜乃いわり
数夜なと折をへこゝ連代ハ二季なり　文集八巻

なり又或ハ草になり
牡丹（かみくさ） 此一なりも外ハ草乃異の名になどなり草の
餘く 蓮生 おもみ葉ゑともの事近代用捨ありけり
あさてふなるよの生の字打こそ
きらふ儘し
冬の種 とりハいりとりといへり野とか山と
かるくしそのわの所なるよしきらつ
人ありいもわを
冬枯乃野山ホ 挂物なりうらきし嫌
儘し
冬枯の芦火芦屋 なとりひてハ
挂物よ引むは
嫌やくけの木かなしてこ同し格て水邊よ
も二句嫌なり冬されのあし田鶴なとも挂物
水邊ともうしなり 嫁し流け なり此義雨を
きしを嫌なり 嫌ホ日本

記なり此義とつけてかしともあり給てなり其嫌
雨来り
嫁の兄聲 なといふ挂物なりあれは
かゝき なりみやまなよの深乃字二句嫌ホし
鳥乃もふく 是て鳥乃ともなと又まやし
吹といふ字二句嫌なり
風なりハある句ふりわりハ三句雪ホハ雨
と嫌なり降と云字吹といふ字ふとふ小
又句嫌といへり
ふりわ なり皆ひくなと付なり此異なり
他嫌く
笛をふく よ風乃吹同字やふる句嫌 ふくるふ
や組雨を嫌ふきうといへり
耳ふるなり新なり

月乃文字　ありて又来乃文字様あるもし

来乃更　更ハ小夜なと兆時分更とハ夜来以前乃事なり鶏のえ小文字にハ付へしといふ也

更　とハよつなり来あまり更としれ暑折と嫌ふるニ小つき二句さらに深乃字とミや月なとみとむも二句なり

文　戯ニ一たひニ一文字ニ一句章三句也此内也新式乃初也文と当章といひくても戯にハ並く一句なり

文　り学不付いつれ乃文字にても嫌也学子なよりとなり付つけとハいふなり文学なとハ文此外なりあるへし又今ハ乃時にはこれひと無季の執文あるなし此僻いつといふなり折も又此まあるつきり

筆　季一あり
なり人倫なりあらはひとりハ人倫なり又ものよ具なり注也

道遊き　なり　なと觴乃字なりあらは根乃字の心の他句によるへきや

二

心月　鞞皷（きつき）なり此嶺に月小ハ七句去也心月輪乃事なり月雨ニ秋乃月ふさく
又こゝろりて月をとりめうすもあり

心乃闇（やミ）　月此来かふ

心乃友　人倫なりつへし此去なる句りよるへし

古の法乃杖　植物なり二句嫌なりさえく乃なをいふなり　まさ虫南かう乃もいり

心乃松 植物なり不嫌待乃字にも心あり心の枝乃植物なり二句嫌と宗祇八十ケ条に書りてこゝろの松雲乃字ありハ五句同字去なり可捨ん心乃松恐ハ枝によりていま植物に二句嫌へしといへり

心乃花 正花なり又植物なり二句嫌也新式乃詞ハ強ハ嫌ふ打越にけり似物ハ花ハ正花ハ長にあらハ於

詞の花 とも木の花なり雨を嫌なり自然
正花なり用ゆ作ともとも雑なり

意乃る心之猿 とも有生類にあらハ於

こゝろえ とハ詞なり葉乃字ある句嫌也
他句ハよりに色し

試(こゝろみ) なりん心乃字二句嫌なりて句ハしも
用ゆなり

木葉衣 非農子の時ハ木乃葉を綴て衣なり衣とすともて植物衣類衣手に嫌ふ乃ますり嫌と新式なりあつハ木葉衣橘戸なり乃もまりもり乃雪花の雪木ハ去りてによるもし

七夕乃衣 花なり衣類にあらす

霞の衣 衣の字ハ七句去也

木葉の雨 非降物也乃この時衣にすなる同木乃他ハ嫌なし儀皆郭公師

絵今失念とするはしまへつきく好古なり古詞後見乃人くみこゝろさしとあつくあまりと書捨作りなりに今都小て名をえ出承好古木乃その衣ハ雨にさせまり句術なりとも非降物後加筆畢む可信用者也

木葉数 なり冬山海さまと同意なり比無之此ともにてよきこと挑承なりたとへむ色なれ

末玉　末之字玉乃字たりとも句可嫌歟

末よ乃梅　梅のあり二句嫌ひした
まよ乃梅のまゝなり

梢(こずゑ)　只一もとも松ともいはんて一こずゑ乃秋
去の中にあるべし

梢　枝付ても分別あるべし
りまよ二句嫌なり末れ字同前にこずゑなり

末枯　りま乃字枯といふ字ともに折を
嫌なり植物にあらず

末枯　り葉乃ことくもおりを嫌ふし

末枯　只一や末枯野なと乃風体乃句何といひ替
ても皆其句去や荻の声なとハ二句嫌や

九重　に都同し折を嫌なりこれはいかにも
いはゞ同前なり

片敷　居所なりうたひゆるしも居所によるべし

苫衣　苔の衣の袂(たもと)の類植物あるもち錦数に
もあるとといはゞ

こけ乃戸　去事の庵なとゆゝり居所や

苫筵(むしろ)　植物なり衣ふなりあるをもとなり
しては衣なり

箱(こ)簀(す)　り小乃字不嫌小乃字をおくま
あし

越路　にて名所二句嫌なりさし此海とい
名所に三句なり此歌を

桟路　にこゆるといふ詞二句嫌とよあるべし
なといふに二句嫌なり

窓乃山　依句体名所なるべしおさハ名所に
不用其意の所なりなるべきなり

あふ悪 まつて悪乃たぐひ名二つあるなし あ
きはの世 まつ悪のかり乃次りへ
釈教述懐ニの世乃うちにまくへし
これもよりれ次ニある難之
悪しく きはしきいはんてとあれはいは人もと
ともニまり候 こはしきと二ハけくと
以ふ紙あり
悪草 非植物候悪草乃たけのうちをまといふ
まく植物り二句嫌あり
氷 一うきしは一はらてたぐひ乃内に一月
乃お後乃水雪霜ホのうちに一水宝ハ
よりのうちにあり候うきしはきるはのうち
りハある色うれひといはあられ中へあり
云ク打を瑠て四あり於ハ水宝四乃外や
不給要とよてりて水一月後のるに一霜嵐
ホに一たるはつらにに一まり水宝ハ別にせと

こく只水り打と嫌へし ともあり
雪霜同ホ乃 水は述にあられ嵐のまり
りりねこうりの同前
去年去し 是り一句乃うちのまつやし
他句く
今日 小とも日今と以ふ字をも子に一切に不嫌
之付ても くれさば也 書
比之字 り年来日来 近来をり二句
嫌へし
比乃字 韻りハ四とおわとも近代ハ二まり
韻小てうつハ字去まり又いたく
韻り四いりトも可用是り候定も
比打時 いつれとも同しこてうるわくにはあひさ
二句嫌へしとまり候此にはく
まりおかり今のりまにさうるや要用乃候
うちれとりてつきにあ御く

詞一ことれもと一ことのみなれたゝこの外にあり
鱼しと云ゝ　以上折と皆あり

ことゝ　に葉の字これを不嫌ことのことと云も
葉乃字なる句さらにあり

詞　小筆句にありて一の付をあるへし京にて
此比同物にて文乃まゝわれて大略嫌也
といへり　かく乃ことくもこし未波なる詞上下
嫌ありニ三ケ所まゝあるを以とある
へしといへとも是は先可治定

言葉乃葉草　葉は式ある句嫌へし

ことれ葉　小以下二句嫌ふと云詞に二句嫌
なり又以下とふとのみも二句嫌や
此種類この詞ニ非と見ゆることなれとも

詞乃林　此一冊ニ乃らんをたしく
抑ありまり論く

たとへは　有詞ニ又海ちのしたきたと
いつる二句嫌へし

うれと聴こと　言や聴もなとハ事の字
やら言と事乃句付句と
らとき嫌へし

ことり　りうれことなと一切り不嫌

たとわき　に事乃字嫌へりし

子　にあちらくまふそりて四季にしたとへく観
子とりは葉子扇子なとと云ふうすまり何
も折と嫌へし

小鷹狩　ちうかり用すや是小秋なり
そうて小小鷹不付ても一儀を
といへとも錦かまち秋にまちらさ此く乃
ことゝと云句にも此の春や小鷹れ終り

陰みかんとあり桜なり紅葉なりハ駈乃字なれ共
打を嫌とハいへり絶えてなりなどとり雨を嫌千
河ミ河しくなるの小鷺これ持なり
鳥乃群有り雁乃声なと同雨を嫌也
あとりしかりしの河り入
新ひく赤ニ喜羽山なと不嫌風乃喜
羽山なといくす嫌あとりしニ入
胡蝶 小乃字不嫌く付句にも多くす
きれしこといふニ此乃字是の字乃類とも
有り二句嫌なり
こころあり千句ほと二つありといふ
に

に只一句有り一座三乃に みしかになの
類なり
えんしなといふ詞百韻有りた一や
他深く
て
寺云く一句限り又一ありへし
ちる乃庭なといひても居不るなれ法を
打越しニ居不うを用捨ある寺と云
かしり入
寺乃打越ニ障在くれ共やうの乃字列前すよ
云通用なりや
其此字折り一つまりたれと二句嫌へ
たのめし
まし
秋八あり
不嫌くなり

手ふ手枕　かくいふ類あまた多し

てまくらのわか合をいふ一の付く　とは古し

のてりかりなのまゝなり打合の字付句皆多し

打合乃て　り由てよそなとハ不多なり

ふ　と云詞よりふ二句多やふ百韻に二三多し
如此之詞ふ太略可為二

下の句れてあり　千句ふも只一なり ふと 只
なりも同他あまり

一ハいくとい無り

同下乃句のてあり　なといふとよれゆや 初
心くと出てハ無用や

# あ

天般橡船（あまのいそきふね）　此外邊岸舟同意也日本紀ニ注
見をゆきて順流較棄こゝとあり

天河乃あふ瀬　なと又舟を結ても此外邊秋
なり又たく天河とつけハ二星
乃心をけもハ句うりよりふ示なりふ邊や銀河杰
あふ瀬夜ふり五句なり

天河　船としもひてもあきこ小ハれくされた
舟の字ま八七句まなり

天蒼字　田よるやし天乃字ま二句多や

雨加結（うかひ）　乗かなり体用れ外とい不繞不濡
此乃字れ梵緑多れも一の為用といふて
名うり付て添わり二句多

あり纜つりま
なり

あり小舟ふり瀬といひてハ此邊なり
山影りあし

あふミ乃海　名所なり何も国乃海名所ニ成小
三句嫌ふてよし
粟津の原　名所なりあふミを
明石　より名所付べし
嵐山　乃まとをあらしの山をいふ風体
より二句きらふ
相坂　山類や山にて関ハ句海山数や浦にて関ハ水
逢や相合逢坂書由にて逢字ニて二句
淡路　にて道二句嫌なり山類なとこえてハ五句
已前より小く嫌く
東路　なり東屋同格と嫌ひ外なり八東越なと
ふまてもくきの四所嫌屋乃事なり
あつまぢ　もかしを嫌なり
より嫌二句嫌文あつまに名所

有明　四季なり名一と新式にあるてハ
二季ニしも雨冷秋ニ一三季乃名ニ一句と
なり秀句也乃月の雨り嫌く
又明なり又とりしハ字ハ二句嫌明乃字ニハ五句
嫌なりあと付べし
あり明　にけさあした雨嫌也此乃物也
とも成ハす　しきなり但執をあやしとまり
在明　月也乃月とい字五句嫌下
晨明乃　月入としても秋なりあり明
明ぼの　春なりあり明とも秋なりあけぼの
しても秋なりめ此の朝夕時分云小
二句嫌なり

あくる　子朝乃字又きこゆるとも云詞二句嫌也
あけぼのも同前
明暮　とつゞき去る詞時分に付ては不嫌之夕の字有時ハ二句嫌也明暮乃二字ハ同意去なり朝夕なり暮乃字同前なりつゞき候やうに
尓かるべし
あくれば　なりけるも二句嫌也
朝乃あくる　子戸をあくる附句なりを嫌也
あけがのみとあくるも同前
あくれば　子曙朝に似たるとて二句なりあくる
あけがのも同じ朝にまがひて句嫌ある嫌
なり
明闇　朝に時分なり曉朝乃明けんとする也
もあしく見ゆる時節のよし也暮乃
字なり二句嫌べき歟

曙　あけぼの　只一是も朝に時分や朝夕とも子二句去也
ふ詞も二句嫌去のとは云をえ一座に二計也
曉　只一を曉一只あるハ時分にもあくるりも
二句嫌なり
朝乃月　なと朝乃字入てハ百韻に一や夕も同
あさ月のあけてなと又相と替て来也
あしたの月は体なりとしても只一なとゞ可有不
謂夕月も同前
朝の字　異や朝に一つやあれば一けさと云
やあさけさハ朝乃うつりにあるべし
朝附日　東に付て日なと只朝日東にあり月も
不嫌從朝てひなしひ乃思ふなといふて月
なり五句去らるなり　朝ぎ哉　ただ時分も
なりなり
檍　子朝乃字新式に詞に不庭来といふハ不嫌
とは心不謂と云るや只二句嫌也可用心候也

あさがほ　あしたのかほとかきたれは秋なり是ハ皃といふ字あるゆへ二句嫌へきなり

青　なり緑二句嫌也

青葉　に鴨水鳥なとよし時分に青葉と付る事例の用付にて嫌也他准之

青丹吉(あをによし)　といふ詞也青ハ声あれ共二句嫌なり

河(かは)　色て芦火または又芦田鶴芦鴨なとの名小一あり三の名何もわかるゆかなり

葦屋(あしや)芦火　下略なといふ詞を合てかかりいふ名かわすひくハ植物水辺なり二句嫌なり只ハあしや河ひならりハ非植物也又名所のあしやハ所の名や

芦田鶴　植物水辺也不嫌と名かれの芦田鶴なとあしハ植物水辺なり二句嫌也

芦鴨　植物也不嫌ハ田あるゆへ是ハ水鳥なり又けのあし鴨なといふて植物ニて二句嫌あり田鶴おなし

菖蒲(あやめ)乃枕　あやめ也植物やあやめハ草なとしても水辺なり

浅茅生　居不ニ二句なり浅茅と計ハ居処者ニす浅生ハ乃生ハ字物を嫌也

あきらふ乃宿　安方ニ五句嫌也あさとハ居不と植物よあまりなり

秋風　ニや秋の色ともりものそ又一とあるも云替りとよまず此時乃月見やまれやうりくりへ

秋乃田　雁鳴と添て植物ニ不嫌ありハ田ハ居よそ秋乃田ハ常のとなや雁鳴ニて秋をりつ時ハ植物なり河のすハ所編なり鳴をなつなとあして植物ニ二句嫌也不捨秋乃田と

ちりハ此種也

椛乃葉 りかの心なりそのことはひろく候

秋のさびしき ゆへりまの字二句に嫌なり

やてさびし来さびしきといふなり

紅葉も まも秋乃さびしきといふ字点一や

椛乃涼し 秋 よ秋のあつさなきと同前也不苦と

いふり作老てよきなんぞ小無用なり

椛代秋 と呉名すれ心すこしなすれ来れ

を嫌へし

錦乃字 同字去なり なの錦の類ハ可替れ事と

すてしりかちの類古作なり

鳥の錦 字去なり 作も文字乃方ありて

折と嫌ふし 其ゆく鳥乃あまる名ハ其を書とれ

文字代心なり 此唯ミ此りしの可よ妻作く

雨 一ある一名と新式に嫌くといへども今ハ雨

二 近代此段すりかさかく雨除雨二

此雨は外うりまへしとは杜風乃雨去まのまうり

さあ一あり一時雨二夕立一五月雨一可申し

雨乃雨 時雨乃あめ五月雨乃あめなとも

可そ時雨乃あめなとりいひてもたく

し石まて乃まうり雨二乃外や非え雨よ只

あの句嫌すし夕たち乃雨なとも同前なり

あの雨り去こ石夕立ち木火も不嫌いはれ

けるあの句去まり先条よ同前のすなるしく

雨 あめ 可ん なまのうしよさあめあるへし

嫌く ならあめのなと同前

雨 とりなるよ付けて又あ候さの名と付るすり以外

比無なり指合よハおもしれ可分別此乃類なり

杜風木葉作書ホ 乃雨ハ雨のすよ可嫌作

もお後 可さよ嫌く

嵐 近代二なり此外に嵐山あり同字は嫌指
の沙汰や同名も一つまでは絶えずもあり
しかし山をも風神の心あり用たゞは嵐よわを
嫌はし不論伊勢の山に馬名を嫌ふ者なし
山としりても嵐に名を可嫌り

あらしの床 座にり二句嫌ふべし

網代 あじろは小はわを嫌ふや志ろに是二句嫌ふ也
ひをも名を嫌ふべし奥よりあじろあまねく別
名嫌ふべしみすこれあじろまして佛経に七宝羅網
のすなわちかくのごとくなるは二句去すべし

あみ 可編心用しく又句嫌ふべし

海士のたくなは 燒り あじろは縄なと
とをもこそ知なり人

のあやまり流さし今なり

温 あたゝり 長閑二句嫌ふやあたゝりなりの日とあるゝては
非暑あし不謂たゞ温と書なり

あつき 子涼しき嫌なりあつくて寒き涼し
なとの名何も二句嫌なり

扇と盃 秋なり夜可依句持なとあ秋とも
たゞ秋なるべし

あみ 子あみと以字二句嫌なり人倫なり
如し ハ人倫ニあらば

あひやう 子あひ字不嫌と新式にあれども二句
嫌なり不嫌といへるは背拍の今案

なり是ハ誤やと以ての外の事ハ分編ごとく
あり今案を管理に可用之去也

溜息 あり小も海りも二句嫌べし

吹あらす 嵐の風 海などとして又風の如く
海などとまるべし

あら玉あらかね 此ハ荒乃字ニ二句嫌也 あら玉ハ改乃字の心なり

あら玉乃春 と云事もしといへりあら玉の年 あら玉の月なと是あるへし 此

あら玉乃長とも云へきなり

あられ ニ雨人山之なとの竜乃字嫌やなと 玉なとも二句嫌や

阿こやり文あま積 なとい天神大臣皆 百韻ニ二なり

まへし

あまし うひ月まれ月まの月なとの数二句嫌へ

海士 人倫なり水邊なり

さ

里非禾 此屋禾抹年のかゝれくるハみな里 うへくといへり

桜乃宮 風のみや なと此名ハ他准く何も 伊勢乃末社なり

佐保姫 此非紙去田姫 同しなくしてひめなと 乃事何も ひめ一所ニ二なり

さかひめ乃衣 此衣裳共ニ雨にも猶くけて ニ頌事なやく見出しをへ

きたあるり

たつた姫龍田姫 名禾ニ成へしと今案 ニ然しゆりい儀可

目なり

桜人 人うまれのや桂ニ二句嫌也此人倫 人の字なりハ句倫字去なり

桜 只一並桜山さくらなとも一句嫌 只桜と一ありても不苦

ところ是新式の例なり桜二おゐて一りし夏
冬の名なりけれ共さくら二の内なるべし
二本かりしむかしよりけるなるあるへかりしすなはち桜を
つけ又桜なりともと付るとも如此しく儀式なり是
あらず遠輪廻なるべし

桜戸 或は句嫌とハ植物と居所とに嫌なりさく
らの方より宿のことなり

さくら田 植物なり太山桜をいふといへり

花の雨 はしりいの字は書とも門をひらくか
と付る句ハりを可嫌ことといへり發の
字ともかくゆへなり

咲といふ字目なりあるべし

藤乃庵 植物なりあらは

仮枕 植物なり秋なるなり

藤かさ草ぬきさ なと何も居所なり

さくとえの 二句嫌なり さくとすと
よる名前を嫌なり
乃かる用し折を嫌なり

仍まれ乃 三なりし草の数といへり
我もまなり三句草なりハ
五句嫌へし竹ハ小ハ三句嫌といへり又あるい例は
竹ハ弁ニ五句嫌とありえの用あるとといへり
もくのさきハ別し不発草れ新に治定なさり
なりし弁小ハ五句嫌やと云説先不用ひや
山伏のもくけ藤の字を用なり

仮め 草なり
小から草なり
仮り

手毎んなりあらは

扳り一 只一条 呉苗

猿　冬ヽ一ましら一　霧や河の都や　小も山の心より小乃字より付句計　嫌へし
澤　冬ヽ一名所に一つし
さ山
神なへの森　なとりかす猿にあらね
さゝ浪や大津の宮　なと枕詞なりきれ　危や他作く
神祇石さゝ道　萩　神　粟　なと何て小の字二句嫌也
小冒康　より小野なとの字付句計嫌や冒康　小小小乃字に嫌く大事より此神に入　何心なんなと付るまとも
さ牡鹿　嫌なり
寒　冬也秋よりいつれにもあるへしそのかよさ　ゆりなとあり

寒　小さゆうし雨にあり但同冬小いまへうれ　冬おさしさり秋乃さゆうしに一のまゝく
さしさき　きりふ小しまき神しあさりあつ　きも宗何も二句嫌へし
神ゆれ　冬より一他季より一句と二なり
日乃さし　門とさす垣乃さしなと付て名前と　云説あり二句可嫌ことくより舟
きれも同前　なとく小句り松弁にあやの標と付て打
里　あり炭火ゆりとのれ可嫌へし
置乃海士　此居江此人倫名なり但垣順　なとあへく依句神人倫まうつきう又
酒　盃なとさ字とも　まとひて霧あと乞弁葉をひをまくしう　さ肉りあらへしうくれをくいひ
年り数大臣へ一つなり

さかつき乃光　なともまた八日に二句嫌なり 既にありぬへく秋乃季や
されは式乃月をとりこしもの季もあり然く秋の季
あらぬ月なりハ二句さらふへき歟
五月雨　共に一梅乃雨 一むめ乃あめ 又霧なとと云
手かさハしかりの汀子節く
五月　なり　是明ハ句嫌 月乃字なりもハ句嫌
さしむ　なり雅や某の的ハ二句嫌ふへし
月乃さしむ　なり見乃嫌へうけ
つわなき　忘しきなといふ事なり二句嫌ふへし
ゆきあしきあ雅　と以て某句よまれ字二句嫌 嫌ふへし

ゆふさ　とつれく 西を申すなり
さゆ赤　さゆしくといふへく まて申しと云同
まあつまも云いひなをとも二句なり
さをしき　つれくなと小忍を付らす不嫌と いへり
小小（をと）　嫌く おる付句つりを嫌やとりれ下に妻
さハ　准く なといふ詞百韻り二句かりおそし絶
ゆふす　といふ詞りことさへ二句嫌ふなり
春さわく　夕されハ去乃字の心ふてハ句一去 なれはとといふ心なり
催馬楽（さいばら）木乃久　一句准陰とハその物によりて 毛季をもつとりよるや

# き

**大君** 此も人倫にての君なと云ても人倫にあらはれ

**大君を** 慈乃君にありけれ共都に行人なとの執あしくありけるも何と遊ふ

**時乃鐘** 今の鐘のやうに云てハ時に嫌ふ 鐘なりけり時おりも有へし

**きぬた** 一説に一句や時の字とも有へけれ

**岸** 一名にも一行にしては此の岸のまゝや板岸 二乃外や此外の事乃事にしと板岸なとし云 たりんハ二の外は八丈あるへし書ようも見へし なと云も板岸のまゝなり

**木と木** とよミ替りて一句も折句小て有へしハ二句去や此外の事

**木とミれ** 又なにとしても折句ヶあれ

**木曽** 此木乃字二句嫌 岐蛆とくゆへ有り 神中折りもよし

**木より** 新二句嫌ひけりたきもりまへり二句嫌なり

**進丈** 二よりかの字月二句嫌せし人倫なり

**几帳** 此木用ても二句可嫌 此木乃字二句可嫌いくとあり

**菊乃花** 横を云なとも云はすして和歌乃事なり 折句り二句嫌なり

**草** 季付くく二有へしと云説いへりと云り 一句にて

**きくの剛** 此も嫌なり

霧乃海　みすゞの海也何にてもあれに
あつかふ

霧の籬　屏にあり一句なり垣にも籬とも嫌
籬にも垣ハ秋を嫌也

霧雨　と一まいて又霧乃ひとつなとしまとも雑
雑也

霧　従年中より八句編嫌なりけりハ秋を
きらふつなり

霧乃香　きりの香とも云　嫌香ハ煙と云
統いふきりにもあつかふ也

砧　一夜に一声まてさし又衣うつなとあつかひ
衣うつといひても秋なり　ゆへ雑とも
きぬた　り衣打二句嫌なりきれといひてて
ある句嫌なり

碪　り板ある句嫌又詞のつきやうはすゝきあ
たとへはききあはせたる付のあし

きぬく　衣打なりあつかひ二句嫌へし
秋なるなり

花の衣　なとしても秋かや雑これハ
いはゆくきの詞の

きりくもをへ　ちてきりくもうつすと又き
へき歟

きぬた　衣月にも月の二句嫌一ノやまとひ
なとにも同前

きさらき　り衣二句嫌へし

遠き近き　遠き近きなとの一字嫌あり不
嫌も付ても衣打のするある
人きらふといへり木嫌ハ秋とも鐵ハ

きやと　云詞ハきりとりゝ心なり一
衣打なり一字嫌へし
ゆのふ治定也

しくれ来　いたりきたるのたくひ　不嫌　二七

# 由

ゆふだち　とハ切字の志てのたくひたるやう
なり見ゆるといへり

ゆふべ　句毎俳諧ならす過なり

木綿付鳥（ゆふ）　俳諧夜分なり四江乃関にも
りもあり

夕月　只一とあれハ三吉その月の頃を又秋と
志らしらと夕乃心なる月二ありと可也
ゆくるやし夕乃字入て八雲一や

夕月夜　俳諧夕附日とい日乃事なり
これハ縁語ひるよのありの
ゆりの

ゆふけ　星の名なりとハ天象に二句嫌ふなり
也しハ夏乃季とす

夕乃字　折に二つなりゆふへと二折と六なり
夕乃うちにゆふへ二ハあるへし

夕　其秋の暮　歳乃暮　老乃暮ないつれも二句
嫌ふなりいつれも許を

夕山　俳名に由て何ハ名所なり　肥後乃国
にと云り由て山に出て夕山の事也

ゆふべ　ありし乃日くらし付ても不苦けれと　白
ありし乃声なといひて二句嫌ふ

夕ひはり　とてきく月百韻一やうの外に
由のかにもあり紀り又由の
ゆりのゆりしやもめ宗なれ志るとより不嫌く
ならの手不てりのなり

夕暮　と云りあけかの心と付てハ不苦打
うしろハあしく嫌と嫌とハ皆さ同じ

夕闇（ヤミ） 夕乃字のかゝりより夕乃字よみ句とかゝり
あるや書ハ字と二句を筆の時分不嫌し
ゆふはの宿 桂なとやこれも夕乃字よみ句
あまり夕の字此外なり書
乃字ハ二句嫌 時分と以てまうちし子時分を
おうしゆかりんと人よみゆかれもかうしせ皆や
夕立 なし一かくの如くすり句ハ皆一とあやし
夕よみ句嫌書ハ字夕立乃字ともニ
句嫌なり
夕立 小雨をも付て手まし子電雷不可然こと
これ彩式乃類なり
夕立乃跡 なるといひても跡二乃外也なり
み句嫌月雨露若以なるをも注し
ゆふけ雲 なしてもも夕ちのまよりなり文
夕立不可と降物なり ハ二句可
嫌り夕乃字立の字共小式小可嫌し書ハ字小も

夕時分まもみ句可嫌 夕ぐれなり涼や夕ち
風とまこらあるへし
雷 雷やしは外雲乃雷一所物乃雷ハ自分乃かなや
遊まなる雷句掲雲乃雷雨を替て用し水室の
雷そ可為雲雷唯富士乃雷為他季者又同文字
山本式かハ雲雷為雷以と新式乃類や以論他季也
り雷なり中此かハ乃雷ハ三申の物雷分といへく
夏なり水室の雷ハ冬雲乃外なりて唯富士よりや
かへひ山乃乃女東よりまり中古ゝ説不用く
富士乃雷為他季ハ又同とハ雨を替て出へし
と云心なり打きれまて中古乃要願なり不用く
只要をよらくいつく御中乃云所雷かも冬や雲の
雷をかくて雷とみしく可心得や世お伝あ
りあうすて見程わるうりて破邪顕正乃あも
木すかりしく候し所物乃雨雪とりしつかハ分論
月乃雷花の雷乃類なり

雪　ハ富士を付て又ハ宝船や富士の雪　秋
室ニ国ある乃候ふわてなし

雪折　ハミとれみつきなと用　而を嫌也

雪　よかし付る事今ハ嫌なり

雪解　ハ山ひ山ろと付る事不可然となり
同而を嫌フしといへり

雪乃花　梅花ハあしく降也まてなり

雪　といふるハあしきと付て又ハ雪なとあしく
雪を用ると嫌候連歌乃大意とす

雪を　六乃花なとといふ数嫌なりいつめ異名を
りとめ色りしを

弓小矢　数弓ニ升鏡を嫌而子入それと紀
ハ云弓張月年乃矢ホ帆此數

継弓ハ替折ハ二句弓ト矢二句嫌これも折を
可替なり弓張月と弓と又年乃矢と矢と
乃ある又替折本乃弓矢を似て梓乃矢ホある
もしきと以絃不謂光陰矢乃ことし月以弓
といふ数又可名々事小治定を

ゆり　帆船なとことをわて乗ものなり

夢　七句去や大ること夢ハ恋ニする也やうの恋乃
夢ハ元より勝なり其乃ゆめ秋乃極候
なし其秋乃りしこて八恋なりなれ又ゆめと
いふひたましひりなる小ハあらす

夢の浮　とつきたる詞帆乗なたとひて
浮して　ゆめと云句ニハ付と云
羽入そうつ乃月りひらわて乗るにむすび
小ゑつ祥あさむなく二句嫌固と稀
雖も

夢　なり由よろむなるに而を嫌なり

夢とは句にわかりけと付て月抔を付人の
身の上にいひてを代に付く文字に候す
思ひ不可嫌以上新式の詞なり

夢の世の 新式に見るさいはひなき也しあらひ
夢つて句なり夜分に成べきか

ゆめゆめし とい云ことは第一二句嫌なり夜
分なりあらん

紛 句後二句嫌なり他方のゆくゑなどは
二句なり道のゆくゑ雲馬などのゆく
ゑなどいふく川水と舟なりも有句嫌也し 夢
此の心のお達なさし也や

川 にゆきくの文此集に二句嫌也 文字替
ゆくなり

極くえゆくゑ 次なり一座に二ノりを
一ゆくゑにゆくゑ
月のと云嫌ふ所にて歌と書入るなれば用様

の詞なり大かたは源氏の事と見えたるなり

# め

鳴神 日吉鳴雷神物に上神あやしきの事
かくのごとくなる社に鳴神
鳴神 とは伊勢を天て御神を
いひ結ひよう八幡と
なるつとなどいひ小神をあらはし神といふ
新たなり天てる神なりと云ゆめと名神といふなり
伊勢の神の結ひの神小神の神とは皆
名神なり地頭く

なみあめ 雨とかく思ひて名神に
式の名神不替なるのと思ひてるすありその打覚に
これ六月祇の事なり雨降名神なるの中にや
一思ひよこへきす 廿八日なり

目と云事六一なり目ハさあて世乃かんかへとなん
あやめとはかりし又一ましくよろつのあめさき心かける
思ひ入あやめ乃唯ひとつ千しやう乃ものさにあはれ
ならし此外ものめにてし節端あまりおほかなる
べし是月次

目乃さむる
なとおなつけても文字よいれ
紙乃後白紙次

色めく
かかるめくなるめくといはれ物思う

めくめり
一つめくいはり
なとはなりといへる物乃心なり

み

みそぎ
幣なり御乃字は不嫌し

御禊
水邊なり神祇なり拂除なと何も付てもよしすいろくなるは月あや
六月晦日なりあらぶるなり夏乃悪氣小蝿と成て
人をなやますなり大かた晦日に定と
いへどもみなつき乃中ハ用ゆるべしより段蔵
河内なとにてすくもしばしと中さて見えんや夜
ならへよるとよめり晦日なりかなしげなる澄奇や
麻乃中にてもなしともよめり

帝勅祢子三木
御乃字に不嫌但同
二句嫌といへり

帝
なり門乃字両と

御
なり行乃字二
句嫌べし

みつぎ物
きちよつぎもの
御乃字不嫌といへど猶いとふべし
二句のめ句の外は六句に障定也

よそは三熊野三吉野に
と御乃字にてあり
と他二句也

みかど 御の

みかけミ紀の原藤代乃み坂

きみといへり

ぞあり

御かり ハ鶴なと付つかひて絶えたる

さかふえもいへり

御階 禁中ハもちろんありとあり皇

居ふ乃御まへ一切居ふうあまれ

御乃字の事 於を嫌とありおほしみ

かりなとハ嫌てハ雨とを

嫌なりある説ありおほしまことにても雨と嫌と

いへり重て好ちりすれ共ふかうまるハおの

理を弁ふとも絶ゆ依句并説なあり

宮 非紙ハ二皇居ふ二句さの内一つハ

名所なるへし非の字ハ非 紙二る宮乃

家あるハ皇居なり

みやこへ ハ宮乃字雨と嫌へし

宮城野 ハ萩ハかり萩に宮城野付るまま

嫌ありて用付しまて別句嫌申へけるさ

りへ

都 ハ大宮於を嫌といへり絶ゆある説に雨と嫌

都 とひへり付句を用へきとなり

只一句の内に一勝に一ともあるも一ハ名所なりとも

勝なりとも又はし都となりとも二まてし

都 とハ白りふ賀なしなと付て又古里

あしき別都ハ古京おもひつかハ

都 ハ田舎を嫌絶ゆわすう付事まてま

やこ 開林なと高せいへりう用付候や

ハ志賀乃古京の都ハ於を嫌なり勝まね

古京も同まなり是ハ雨と嫌ナし只古京ハ

都

二句嫌除し乃ことハり捨してひとつて申也ハ哉

冬と春とあへし
都鳥 名所なり折りにふれと嫌ふへし冬と
三ケ月 うらし乃出句ハ秋部へ入ハ秋なり
三日月 ハ月と付る事不嫌く
峯 二ツあり一ツも名所なるへし池嶽等と付る
麓 一ハ名所なり但麓ハ峯と二ツもるへし
より言根折と嫌これハいつれの説も同しくほ
尾上遠山あまし車雨と嫌ハ治定なり折を
嫌といふ好古もありてまくしゆ雨と嫌ふと云説所
へいへん秋山嶽山の名もなきのまゝやりしよ要細く也
此末決なりの事ハ高家の古跡也人遊なり たとへ
在理到ても好とも律論あるか思ひしも

見ぬ山 みかわぬ浦なとハ山なといひて ハ勝なり但此伝いにて句より
湊 みなとへしといへり
湊 二あり一ハ名所なり 但し水乃字不嫌く 汀 よハ水二句嫌
水鳥 名とハふ字あるわなまても用ありあれ作
用乃外なり
名 りうくさみくわて見こりみし数なと
いつれも此數の句嫌なり
りみなきり不付くといへりさりしく二句嫌
水 但さり
名 菫乃跡 小さく繪等文何も付也但心同
といへり書とめし体ハ跡乃字よ
折も折りしかんり
硯 なく一此外なり法乃この折りなといひても
あるへうしん

みぎり　ハ庭打と嫌ふ。庭前にハ二句去り

砌　ハ庭前と二句嫌ふ也。庭ハかれこれあらず也。細
いふ也。砌りハひろき心あり。閑居なとのあ
たりに庭をけしとも、其のいひりよなとより
庭のふかき所にもいふ。なその細りも、そのいひり
なとい家のゆへなり

道　ハ望遠海なとの海ハ二句去り。山ちなと
といふのみ也。海ハ二句嫌ふや。以下なとも近く

右　ハ望やこちら二つらより三とも子二句嫌
なりつらより。山類なり

岸道　なとふ山海なとハ二句嫌ふて一句絶
歩なりぬ。た海なりとそのうち二句去
らいなり

霙（みぞれ）　ハ雪ハ雨と嫌ふや。蓑（みの）ハ笠二句嫌ふ也
雨ハ二句嫌ふなり

蓑笠　ハ降物ニ不付ともいふ。但これハ雨
ハ嫌ふや。うきりハ降物ニいれ不用
いふ紙、但白りよろしきなり

みどり子　ハ緑の字不嫌。おの説り打と嫌ふと
いふり。或説にハりありうちかへてと嫌ふ
へきといふ付るものといふ、ありて雨と嫌ふへきか

身ハ曲りて　なとといふ羽化嫌

みハ虫の音　なとに胡蝶乃類なるなく
いふ。神不似合声なると云へ
来るなの内りあれなとへしくうさなとしいふり
雁なとのやうなる物を付る類や海のさとしいふ
さりくかへていふ人倫乃外いふくいふく面影
未なり

見頭　みこころにかかるといふも二句嫌ふ也

見付 り折までは二句嫁とかく入悩よしへ
他より折まで寸分とかハ不嫁
みそぢもそぢ いへ乃よもひ乃名やしらハ
年は字二句嫁なり数乃とと
なし三十四十八そぢといふ字をみてもみや古今
乃序にそぢ一りとけるハちといひても
年乃字なり不嫁字ゆゑあるまいすとそぢといふは
字にハいはず見えとんたいより

遠見道見 きよのこり二句あり

三字名れ 月雨と一つ嫁なりしハ月の縁
なりまたくらなとそこ名乃色
きなといひくくもくし他四字よの字ハその
作なし嫁三字なるハまれなりおゆり世更の
よ尚やさみこせんさくす夜へりすなりとも
いまて古りなて何かまなり

し

白妙 きよの志らと志らとは打を嫁や志ら
と志らといひてハ雨をさらふなり

志らさと 志らさとの君も同し打を嫁
便し

志賀乃道 子方同打と嫁也し嶋と
いふ字も同前

嶋 志らて千鳥八十嶋などいひてもあり
へつ出

嫌 字一焼一嘲一是彰武乃ことこや志賀高
りしや乃ならりしかくも家とこふ色し嫌
乃ふうなり

志賀屋志ほ焼 ハ此体用や志かまなともに
秘用乃外なり志かや
まとりへそんへ編なり

塩乃海 ハこからぬ也と心得ましく人乃あや
海乃物なり
しかまこ山路 なといひてハ山類の辺
あまり嫌なり
しほ屋 居所なり二句嫌へし
清水山家 かよりきくしれ二句嫌
なり
清水 とあらは雨よきよれは物嫌なり折を嫌ふ
いふり清水なりきよれといふ絹付句つり
嫌なり
志賀の山越 なとも花を山をひてて
嫌りあくもを
しのうちミたひ などいふ絹の逸り
折まきしと嫌なり名所
小ハ三句なり懐紙のなりて志のふの山なと思ふ

又まくし浦とはきへるし世他作とく
しのやまれ志つ枕 なとも同じの是又
山類子二句嫌なり
しのふ摺 植物りあらしは志乃ふとい字り八
折を嫌なり
忍草 秋なり忍乃字り折を嫌へし
志乃ひ車 帆走袈裟せる車乃うちや係
係不審とまんせられなりた
す為主といふりまつなるし
しのふりえ乃寺川入りしれくあり此れ
後とさふりとりむりの大なとの影三日同意
はりきミ
榛乃きり葉 なとしても植物や釈教なり
ありて巻り寄法く
世く榛とハ帆釈教と書給ふハ
下り不審とそ此こわき釈教歟

椎（しゐ） ハまぎらハせる物なり実ハ九月秋や椎柴
も秋なり

下草 しも萩なと何もたえハしたくさもしたくさ也
下乃字のうしろやしもくさもしたくさ也
なとあるへしといふ意なり

しげミ 雉ハ山かいかと下すて下さハいづ
とあり草木をへて八狩見候なり
しげけるも同前

しげき野 なといふり植物二句嫌候事
しけき野などいハヽ植物不嫌之

下萌（したもえ） 植物なり二句嫌候事
あらて下も下萌とつりハいふ字つ

下紐（ひも） 衣裳なり下れ字形を嫌へし

簾 只一簾子一もの一つ也紐のことをさしてハ新也

鹿 とりこらとりなとものなり一切り近代
嫌なり

鹿乃聲 なくて野の色もとへ入引紀
しかなと草なともを見るとハ
しか へりす
なてしかなりなくとかいても有

柴乃庵 柴乃戸 なと述懐にあらハ行也
柴乃戸 なり植物なりあらす
なとなくて又柴をふなとハ不嫌
柴をしなくハ不一つを絶嫌之
柴の庵なと也植物なりあらハ

しをこれ

しをり 植物なりあらハなり二句嫌也

しをれ 類冬一つ後の志をれなといふて冬也
二句のかゝりなり

時雨 ハ時乃字付ても付すしても（しくれ）ハ付るもの
時の雨といふハしくれにて候
しくれして なとのやうなるといふ心あり
とありあり一つ 四なり
　もとあり小ハ折を嫌やして
霰 ハ雪乃しくくなるとおもて嫌ふ霰
折のしくれとも降ものあれ
しの 草乃類なりとより嫌やうも替ると
しの 小ハ句といふ 作
しらめ ハ絶ハ二句嫌なりしかし小ハ不嫌く目乃字ハも二
句作ハ付くる番
なのしくとい字百韻ハ見
一座一へし
ありしき まものしきなのしき二句嫌
なり

知 ハしらぬ人しれぬや知乃しれし なと 何も
二句嫌なりむしのしれ なとも同し 季
のしれし乃なり白氏文集ハ賢上守宮何日
消とあるは守宮なりしるなり
しるし ハしるしといひて嫌ふへし
ことしれしといひて嫌へし
なといふはしれとハしるし
なもいふ同前も不苦 之
字ハ前にといふハ何乃字なり
物のしれし
しれもの ありかすしれもの
なとのまへるしれしれ
ありありかす かのやうにもしれ嫌へし
しるし
二ツりまへし かくのことく乃類大るを百韻ハ
過去乃しれり 二句嫌へし過去乃
しれくとも不苦

とあるへし月きよし雪のやまあかしなとてハ
あるへしといへり
むふしと　むふし二句嫌なり山ふしとハ
山遠しなとのしやこれハ切字
りなりなり
志とあり　又しとあり清濁かわりても韻乃字
りハ二句嫌や　てりかりなとも清
濁乃差別なく二句嫌ふおりも如清水にて
ハしありちかひにも二句きらふなり
志て海　世言なりし人乃志りかにて八きこ
えあるとるにもあしよりもえて云
浮け須り
人倫　と人倫と二句嫌へし
十八乃切字　二句嫌その外一字の所も皆
濁字ハ二句嫌なり

時分　と時分二句隔なりゝて時分乃事なり
折時分とあさ時分五句なり夕時分を
同下巻ニ注く
ゑ
絵かく草木　此枝物作を色々ある
てその事あるへし
とハ桜を絵り書ハ是や　お茶をかくハ嫌なり
殊も季をとりつ由りて人物なり二句嫌と云説
不謂枝物うあし　かさ絵乃由りてくろき所色
ゑひそめ　とかなり
ひ
ひもろぎ　神祇ひもろきハ神体なり
もるとたしむろもいふなり

君と臣（ひと） めぐりとくかく中に人へといふ字あり
二句嫌ふべし
他國（ひとのくに） 是れも人といふ字あり二句嫌ふ人
倫あり去る
非（ひめ） さうか非さまひめなといふれ共でも打と云
てひめ二あるべし
日子昼（ひる） 不嫌に付ても余折かはす
日小 朝ゆふひ夕附日なとの句嫌ふや餘附
日なと月まで三句去るべし
日子 月ゆふ乃月打越と嫌ふべし年月長月なと
日なとつくる詞に此類月ゆくと云まり又
月多く月乃名なとハりよりより日より三句嫌ふや所
りの日なとに此日又同前

日次乃日の数付事

余折日ごさ
日合り日日数

亦其外不可勝計

月次乃日 月いくかなと二句嫌ふべし
日あり 昨日今日いくかなと何も付ても余折
かはし一日二日なとも同然
日くらし かはこくれ物百韻あり一や日子
も吹かも二句嫌といふ説不摺付
句も余折かす從ゆけてふまへし
ひくらし乃都あり人まい
も常乃字ゆ日乃字にて不嫌し
光 月日あり一花雪あり一光陰あり一侶と三れ
光陰 子よゐひろ又月日と何く詞に二句嫌
月合し るり從月山そても日りても一まハ不可
惧えよゐひろ又同前とハよゐともひろともは一す

あつえ三種も付句も嫌ひりて哥
ひかり とかりして八日乃月なり然て何を
久堅 天像なり二句嫌なり
久乃字なりも可用字にて宇宙天
火 ならずも川と二句嫌ふべし
四季なり火なりひかくしとなり
火なりおりとさらふなりかうけ八契りこそ
嫌へき類
火 り新木煙乃類二句きらふ也
火乃うち狐(きつね)火蛍火木をやし口乃外なり
従契りを嫌ふへしといへり
火乃うけ 三伸りなとして八形木分あり
たり乃ありへ
桔梗 なとのやうなり也百韻なりたて一た
可きへし

一葉 りある梧桐柳付かりありて初秋なり
柳なりちりてより物されてもちなり
一もちり 只一てとかりと云ても葉川蛛乃
するり七月十五日六日まで八栄へ
へかうんり志のうて月乃まうなきて付ても不
岩といへり
一葉乃船 膝や帆膝といふ説あし
一夏 とつりハ帆釈教錫なとあつても釈教
や一夏と云綱さのて不好綱なり
居木乃心ありて作一むしうなと又ある
一村 つし
一といふ字 句編面に一つや条乃数字ハ
可替於用之案例子にいて
それ数ありと新出子あり八般令一葦一枚字と
いつく何くわを一つ替と云心なり

ひとり 只一ある事ハ一月なりとも而ハ人偏也や花
ひとりなといひて人偏なりあし
ひとへ ひとへに なとり絹ハ一文字二字嫌
等もあり
ひとへきぬ とりては一文字又衣とりて字程に
二句きらふなり
紐(ひも) 衣類なり衣にかなり下ひもといひても
用あるなり
ひ鏡 あり めり しく衣類也ハひとあるふるく文
ひさし 軒用なや嫌也癖ひさしハ居所に
二句去り以あるうも嫌く
ひそやかなり 夜隠とらく居所乃心に
あれさせ意趣なり一体居所乃あくろあ
まとなく

氷室(ひむろ) のうちに秘ある事しるゆゑひさひ
ハ嫌なりひといひあるハそゆゑなり
くるしくなりしかも入
氷室 こり雪雨を嫌ふしきわもあるしく
こりの外なり鵆之
ひろふりひろれ なとり生類二句嫌去り
またハ水辺ハ二句嫌也や
地儀く
雛(ひひな) 人形のるや鳥の雛をいふハ不嫌といひ
雛り和名ハ鳥のひなおもしき文字を云
能て不嫌といふなり不審なり而捨ず嫌とや
ひく うつハよしうつにひくと付つハあし
しも数千所に生類鵆之
なとに用とはすい
てハ植物なり 二句
ひもとろし
嫌也生乃物也一座に一なり地儀く

ひやゝか　當流にハ時分にいくといへりかく
のとく秋の心ハ當季なり

も　きりし後へかゝるにもかゝり迄
まり後まゝてよしとなりかゝり

りしあり
てもなしかゝれは

りかなし　まけてかゝし困文あるへし
他准く

紅葉　春ハ一櫻梅なとは一草たりとも一句に
ても紅葉ハ外なれ共さりは是彰武
の錦なり紅葉三尺なり秋を語なりける
のとしハこの外なれて天河のすなる故に秋不
季に用なき事ハ是も秋を替へし

紅葉の橋　鵲の橋に二星のおもを
かくして紅浪を添もゆへり

秋の色をとそていふとあり此紙不可用也今案
に天河紅葉をそしはませりや七夕待あの
橋をまた川はんとよみつなり紅葉のもしと云
ましとよあり和語なりらし書なり此方ハ紅葉
をそうしてかしやとうさうむていふ錦なるを
近来よしとつかて波との紅葉のもしといふ
桃乃あるやうになりれ紅葉をそうしてて舟なりゝ
いふ本文あれも舟ともそうしとも詠ても桂はに
二句嫌へしといへり紙相河の事一切なり桂
おなし不嫌く

紅葉　なり色二句嫌へとも松の色雪乃色なと
とハ不可嫌く紙不俵句なり

紅葉　とあらてそ乃おりにまた乃葉一紫なるとも
あるへしに

もみち　よ山の色なと月おもとす嫌といへり紙
山の色秋のいろ草乃いろあるにかくて〻を

紅葉に　ここのえ二句嫌ふなりまてといひても
不嫌く　ここのえの葉ハ五句嫌ふへし
乃葉りくえし色錦く
森　に一名けよ一字なやし又云道をたてまる
とうりなりいさし森ふたくまいあしく
よけかれえくさるむといふ乃ゆうと云
家上川　すニ句嫌ありと乃字濁なり
りし津草　植物なりと錦のすすむいひなし
たちんハ植物にすうまし記歎
りく浜　草に二句可嫌とあり抄物りうけ里
於ハ句編也列乃植物よ二句まるへきら
百千鳥　り鶯不若といへとも打を猶て可
於なり百千鳥　噂なきとハ只去わり
ちの鳥のさし浜りなり鶯よ不限といへり　但
すなひまり詠しさるて例なき

くさ
鴫乃掌く記　植物也秋なり志けのおとして
ハ春なり於ハ秋ことといへて冬
まるへし　武士　りとなり人倫なり
もの乃ふ　ありとてもといひてハ二句嫌ふとあるハ
不若と云説ありあしく二句なり
玉たて綵　とつりまうすいへとといへりこれも
ゐやまめなりいきわまるよ法定を
もの乃部　いかやうにても去りするなり
あやしひ　物乃字因乃字とまよ二句嫌ふ也　襟
の字なれちなり何も二句乃物ハ久
字あるゆへなり物をあやふとそりへてハ物りよ
おりひかも五句嫌なり
物名　とハ万物乃名也たとへて時節おふ枕
よみなりれ何のするなり時節夕これの下

のなれと以前用しきてあり云すなり一向名
別のあまりとも不嫌祠の字と新式にあるハ凡
まきれなのすなりまきれても各別のすや不嫌く
紀二まきれかと同し下知のことも有りて沙汰に
不及可嫌く何とわり各別の心なりても不嫌く、
地准く

物を　なと云句の事二ツりとも紀今ハものとし
とし物の事嫌なり

文字あまり　一座に二句なと以すよけれ
たく二句去るへし　但字関の
り　何あまりハ申めくしきへうし　里ハあ於て
りし　あハてなと以為数ハいつ程も不苦となり
なれ　り單子きらふなり

文字

もよほし　なと以ふとも一座に二ツりなり
地准く

もろし　歎小ハ上句下句各一ツ上二なり

# せ

関　只一名所一座二一去秋をとしけ宥なと云て一座文
去秋なとの名あり　一可然ら云く是新式の祠や
以後只関一名所あり一座四季光陰をとし宥なとの
るり一去ろまでと以り秋えゆと三なり

関屋　實乃屋　此様りうこゆうとあーし聯也
何と屋等二句きらふなり

實の字　ありぬ世紀必とせてた小嫌や関の字
ありせくと以前百韻り一なり

武藏野　子霧の関と付て文字なと
付すあし　他准く

迫責　こころを字も各別なり不可嫌く　出六
まうとそいつわり可准く

蟬 只一日啖と初と嫌なり夢もまこともかはるへし
よき出ると入へくれもそふと申すといへり
せん とい ふ詞とまきると云こともあるの間二句隔
なり他準へし

す

住吉乃社 名所なり水辺なりうへつきをる
と云て八名前にあらは案にて経
駿河の海 まつ不図乃名二句嫌や名所乃
こ本なり出る名所に八三句嫌へ
しあるこれ浦伊勢乃うちまといつれもあるへし
隔てり隔へし
末乃松山 名所や植物や末乃松にはあり
末の松と云ても山影なり
杦 るて心乃杦又なし杦乃宗植物にあり
共他準へし

菅 水辺に 菅笠 麦藁なとの類同なり
あらは えんのほとあらき
まそ記 只一尾花一もとかやなといひて一本と
三なり
すゝき まおされ初とさ三句隔へし
まく 草乃影なり尓にきらひ也うつくしく
さりしたりしの両に八
まそて 睦 にまへ二句嫌なりもまそておとも同し
まそて睦山影にあらは
栖 居所なり二句嫌なり住と云字ほも二句嫌と
栖 以字にはぬ句なり
一乃懐紙乃おもてにも名所は寸同様之きき
おとい以流あらし
栖乃軒端 一おもといひく居所にぬ句嫌や
草ふきの戸おそおもといひてい

居所に二句あり居所に二句乃物も如此なくしき
居所の下にそへていふこれも句きらふなり
煙井 同居所打越と嫌なり他乃字ふハ
も句きらふ物
住みなおしいさりなし打越に居所きらふ界
住まいにといふなり
音なれ まさてはなれぬと有御しきなや
りとなりむこれ句に不可なく
鐘とは白に山ハ付くし虫にもとは付なり
も琴り松風糸り柳角に廉なといふし
柳りいと糸と例乃用付商世此用付さし合なく
おもきらふ虫なり雨なり入
墨とは字あて木は事もえあら不し
涼に冷又冷に空もなをこ二句きらふ天あた
ろそこくに対し

涼も経て夜と同しなるの涼しき体なりとん
く又あるへし
涼夜持ふ二まて世の涼き車と涼と云稍みなく
し他句持乃るやと古人もいふハ遠用といふすや
も海しさに市小しひの蛍の數二句嫌
なり此ゝ同いつれも一所しなり
炭山村におしも炭とやく所に山村の炭の句え
りとより山村なりくしく下書に沙く
竹の世に変門打とつゆのなり人の字世の字
所の嫁やうよえ字よへ
拵乃字め句去なり同而不営事を拵かに世とも
つり所の方ハありときらふなり
まさる事くり拵乃字二句きらふ也し
夜のものんくそのん所のものん上に付もりしな
もハ三句れよおし此らんいふりなり

地獄とく

をとす　されとかきれハ二句嫌なりとよろしく

その類あるへし侍り

劉　よき物両代嫌なりされ数年此方ハ露ト提雑

劉の入りあるとさいそいりたひくえなき

かしろよりかなり今治定す

をく雑く　よ漢なり二句きらふなり同字なれハとよ

かれハいつれもまーハさるへしとこれハ念のた

用字あるもあれ心ちわてまうかれともきらふ

なり地獄とく